

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT28088 ゲーミング・シミュレーションを通して現代経済社会の本質を理解する



開催日: 平成28年7月30日(土)

実施機関: 千葉工業大学

(実施場所) (津田沼キャンパス)

実施代表者: 遠山 正朗

(所属・職名) (社会システム科学部・教授)

受講生: 中学生1名、高校生3名

関連URL:

【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

当プログラムでは、受講生が能動的に思考する機会を十分に確保できるよう、ゲーミング・シミュレーションによる実習を行った。また、実習にあたっては、実施協力者となる大学生を配置することによって、受講生の積極性を側面からひき出せる支援体制を組んで実施した。

・当日のスケジュール

10:10～10:25 受付(津田沼キャンパス1号棟10階エレベータ前集合)

10:25～10:40 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)

10:40～11:00 講義「取引に注目すると現代経済社会の本質がわかる(講師:遠山正朗)」

11:00～11:15 実施者との交流・クッキータイム

11:15～11:55 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(hop)」

11:55～12:55 昼食・休憩/研究室公開・実施者との交流

12:55～13:35 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(step)」

13:35～13:45 研究室見学

13:45～14:25 実習「ゲーミング・シミュレーションによって現代経済社会を理解する(jump)」

14:25～14:35 実施者との交流・クッキータイム

14:35～14:45 まとめ「どのような取引のシステムが私たちの生活をより豊かにするのか」

14:45～14:55 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

14:55 終了・解散

・実施の様子

実施代表者による講義



クッキータイムは実施協力者の大学生と和やかな雰囲気での交流を行うことができた



昼食の時間も大切な交流の時間



実習でのシミュレーションでは、自分たちで政策を考えて実行

No.	予算	経高	残高
1	200	300	200
2	120	200	200
3	300	170	170
4	120	140	140
5	300	120	120
6	120	120	120
7	300	120	120
8	120	212	120

修了式での未来博士号の授与。全員無事終了！



・事務局との協力体制

事務局が委託費の管理、支出の確認、振興会への連絡調整、および提出書類の確認・修正、広報資料の手配、大学ホームページへの掲載、受講希望者との連絡、プログラム実施当日の写真撮影等、数多くの仕事を担当することによって、当プログラムの円滑な運営が導かれた。

・広報活動

近隣の高校を訪問して本事業のPR活動を行うとともに、オープンキャンパスの際に高校生に対して当事業が開催される旨を案内した。また、大学のホームページへの募集案内の掲載、タウン紙への募集案内の掲載等、事務担当者、実施協力者、実施者の協力のもと、様々なかたちで広報活動を行った。

・安全配慮

実施にあたり、受講生と実施協力者には短期の傷害保険に加入してもらった。また、実施協力者を配置することによって、大学に不慣れな受講生に不測の事態が生じないよう、体制を組んだ。

・今後の発展性、課題

終了後に行ったアンケート結果の一部を見ると次のとおりである。

・今日のプログラムはわかりやすかったですか。

- ・とてもわかりやすかった 0%
- ・わかりやすかった 100%
- ・わかりにくかった 0%
- ・わからない 0%

・科学に興味がわきましたか。

- ・非常に興味があった 33%
- ・少し興味があった 67%
- ・興味がわかかなかった 0%
- ・わからない 0%

・研究者からの話などを聞いて、将来、自分も研究をしてみたいと思いましたか。

- ・とても思った 0%
- ・できればしてみたい 75%
- ・思わなかった 25%
- ・わからない 0%

これらの回答から、実施内容を理解し、興味を示し、そして、研究よりもむしろ実務に携わりたいと回答した受講生を含め自分の将来像を描くことができたようである。当プログラムにおいては、現代経済社会の取引をシミュレートするためのゲーミング・シミュレーションを行い、また、受講に際して実施協力者となる学生を配置したことが重要な工夫であるが、これらのことが十分機能しての結果であると推測される。こうした方法は、これまでも採用し効果をあげ、今回もこうした効果を実施前より期待しており、その効果を発揮したものと感じている。今後も改善を重ねていきたいと考えている。

【実施分担者】

なし

【実施協力者】 5 名

【事務担当者】

溝口 真理子 研究支援部 産官学融合課・事務職員